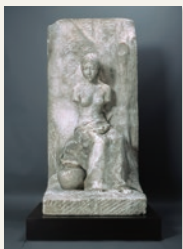


『慶應義塾名品撰』

One Hundred Treasures of the Keio Collections



I 国宝・重要文化財

II 近代のいぶき

III 慶應義塾をめぐる人々

— 慶應義塾の浮世絵・貴重書コレクション —

IV キャンパスの記憶

V 学び舎を彩る

VI アートをひらく

— Column —

慶應義塾には160年にわたる教育・研究活動で集められた数多くの文化財が収蔵されています。2021年には三田キャンパスに「慶應義塾ミュージアム・コモンズ (KeiMCo)」福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」という2つのミュージアムがオープン。また、塾内の美術品・文化財を集成した書籍『慶應義塾名品撰』を2020年10月に刊行しました。今回の特集では『名品撰』掲載の「お宝」の一部を紹介します。また、昨年、初公開された最古の『論語義疏』^{ぎそ}写本について、調査に当たった専門家にその経緯と歴史的意義について話を聞きました。

I 国宝・重要文化財



秋草文壺
平安時代（12世紀）

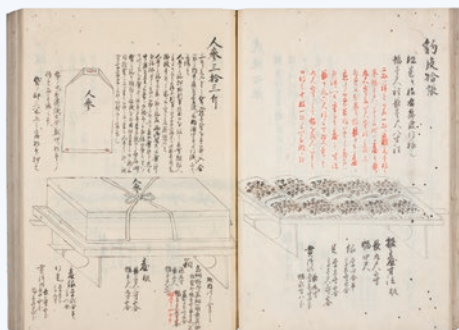
写真提供：慶應義塾

対馬宗家関係資料
江戸-明治時代（17-19世紀）

写真提供：三田メディアセンター
（慶應義塾図書館）

慶應義塾図書館
ステンドグラス原画
1912年 和田英作

写真提供：三田メディアセンター
（慶應義塾図書館）



まず、国宝や重要文化財に指定されているものの一部を紹介しましょう。

1942年、慶應義塾による日吉キャンパス周辺の考古学調査で発見された『秋草文壺』は、戦後の文化財保護法における陶磁器部門の国宝第1号となりました。素朴な美しさを持つ日本を代表する陶磁器の一つとして高く評価されています。

『対馬宗家関係資料』は江戸幕府と朝鮮半島の関係において大きな役割を果たした対馬藩主宗家に伝来した古文書・古記録。1912年に対馬藩邸に保存されていた約千点を有償で譲り受け、2008年にはそのうち895点が重要文化財に指定されています。

重要文化財に指定されている図書館旧館の大ステンドグラスは1945年の空襲で焼失。保存されていた『慶應義塾図書館ステンドグラス原画』をもとに、1974年に復元されました。

II 近代の いぶき



福澤諭吉ウエーランド経済書講述図
1904年頃 安田靫彦

写真提供：慶應義塾福澤研究センター



福澤諭吉と写真館の少女
1860年 シュー写真館
(サンフランシスコ) にて撮影

写真提供：慶應義塾福澤研究センター

近代の幕開けに大きな役割を果たした福澤諭吉。その若き日の姿をしのぶ写真や絵画、また当時の時代の空気を感ぜさせる文化財なども多数収蔵されています。

『福澤諭吉と写真館の少女』は咸臨丸で渡米した若き福澤が、サンフランシスコで現地の少女と写した有名な写真。他の日本人にまねされないように、帰国の船の中で初めて仲間に披露して、悔しがらせたというエピソードも。いち早くアメリカの気風に慣れた誇らしさが写真の表情からうかがわれます。

幕末の戊辰戦争で新政府軍が上野の彰義隊と衝突した日、江戸に砲火が響き渡りました。しかし福澤は芝新銭座の塾で通常通りウエーランド経済書の講義を続けた……。『福澤諭吉ウエーランド経済書講述図』は世事にとらわれず、未来を見すえて学問を続けたそんな逸話を近代日本画の大家である安田靫彦が抑えた筆致で描きました。



とうらんせんもちわたり
唐蘭船持渡
ちようじやうのず
鳥獸之図

江戸時代中-後期
(18-19世紀)

写真提供：三田メディアセンター
(慶應義塾図書館)

福澤諭吉還暦祝 灯台

1897年 大熊氏廣、鈴木長吉

写真提供：ブロンズスタジオ、
慶應義塾大学アート・センター



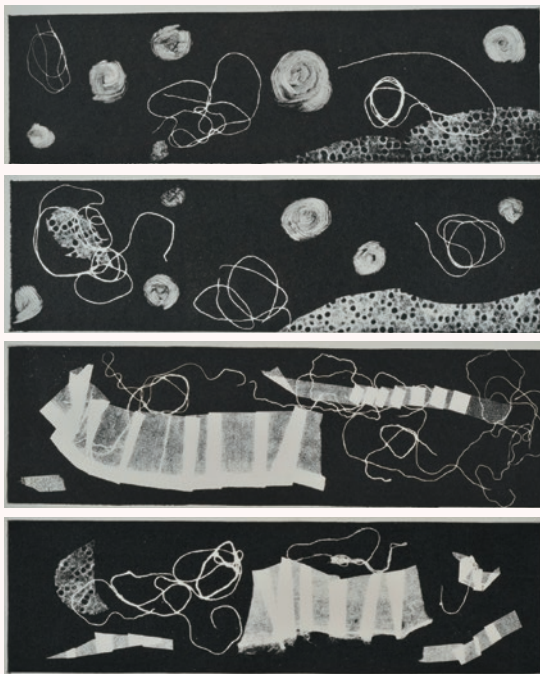
福澤諭吉還暦祝賀会で募られた寄付金によって、祝い品として『福澤諭吉還暦祝 灯台』は、制作されました。灯台を取り巻く波は銀製、岩は銅製、灯台本体は赤銅などの合金2種類を交互に配して5段のストライプ状になっています。天蓋の上、頂点には純金製の風雨計付き、電気仕掛けで回転式電灯が点灯する仕組みになっていました。近代彫刻研究の観点からも貴重な作例で、2008年に上部の欠損が修復されています。

江戸・寛文年間、長崎に渡来した鳥獸を幕府に通報する役割を命じられた高木家は、御用絵師に珍獸の絵を描かせ、幕府への御用伺いを作成し、その控えを保存。それらを明治時代に軸装から図譜にまとめたものが『唐蘭船持渡鳥獸之図』です。

この博物学上も貴重な資料は、福澤門下で後に「電力の鬼」と呼ばれた松永安左エ門により1957年に寄贈されました。

III

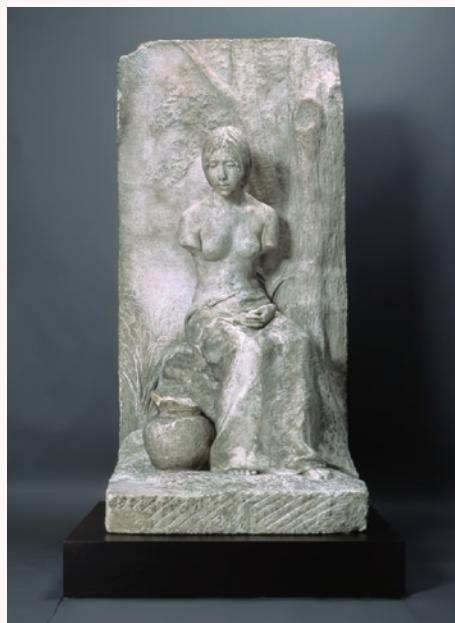
慶應義塾を めぐる 人々



『三田評論』『塾』挿図
1975-76年 駒井哲郎

写真提供：慶應義塾大学アート・センター
photo ©Makoto Onozuka

てみ古奈
1909年頃
北村四海



写真提供：慶應義塾大学アート・センター photo ©Ryota Atarashi

慶應義塾と縁が深い芸術家や慶應義塾で学んだ芸術家の作品も多数残されています。

『手古奈』は万葉集の悲劇のヒロインをモチーフにした日本最大規模の大理石彫刻です。慶應義塾創立50年の図書館建設に合わせて大理石彫刻の第一人者だった作者の北村四海から寄贈され、図書館1階の階段ホールに設置。1945年の空襲により破損しましたが、2009年に戦禍の痕跡をとどめる最小限の修復が行われ「未来をひらく福澤諭吉展」で60余年ぶりに公開されました。現在は図書館旧館の玄関ホールに設置されています。

わが国を代表する銅版画家・

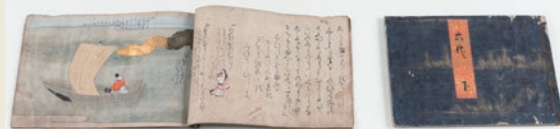
駒井哲郎は『三田評論』『塾』挿図の版画や素描を残しています。駒井は普通部を卒業後、東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科に学び、後に東京藝術大学教授として後進の指導も行っています。

Keio University Collections 慶應義塾の浮世絵・貴重書コレクション



風流四季歌仙 二月 水辺梅
明和期（18世紀中期） 鈴木春信

写真提供：三田メディアセンター（慶應義塾図書館）



奈良絵本絵巻コレクション
室町-江戸時代前期（16-17世紀）

写真提供：慶應義塾ミュージアム・commons
photo ©Katsura Muramatsu (Caloworks)

慶應義塾が所蔵する代表的なコレクションを紹介します。

奈良絵本絵巻コレクションは室町時代末期から江戸時代前期にかけて作られた絵入りの写本。挿絵に朱、緑など鮮やかな色彩と金銀箔・泥がほどこされ、形態は大形本・中形縦本・横本の3種のほか、贅沢に作られた絵巻や大形縦本などの特製本もあります。三田メディアセンターでは『文正草子』『花鳥風月』『酒吞童子』『弥兵衛鼠』など絵巻を含めた奈良絵本絵巻60点余りを所蔵しています。

経済学部教授だった高橋誠一郎は、芸術文化への造詣が深く、日本芸術院院長、東京国立博物館館長などを歴任。1979年には文化勲章を受章。浮世絵蒐集家でもあり、没後、そのコレクションの多くは母校・慶應義塾に寄贈されました。代表的な浮世絵作家・鈴木春信による作品『風流四季歌仙 二月 水辺梅』もその中の一点です。

Keio University Collections
慶應義塾の浮世絵・貴重書コレクション



グーテンベルク聖書（42行聖書）
1455年頃 ヨハネス・グーテンベルク、
ヨハン・フスト印行

写真提供：三田メディアセンター（慶應義塾図書館）



こんし きんじ かんみ げんきう
紺紙金字観普賢經
（平基親願經）
平安時代（12世紀）

写真提供：センチュリー文化財団

『グーテンベルク聖書（42行聖書）』は15世紀にドイツのヨハネス・グーテンベルクがヨハン・フストと提携し印刷した西洋初の活版印刷の聖書。ほとんどのページが2段組み、42行の行組みであることから「42行聖書」とも呼ばれ、羊皮紙と紙の2種類があります。当時、印刷された約180部のうち、現存するのは50部弱。紙に印刷された上巻1冊を所蔵している三田メディアセンターは、アジアで唯一この聖書を所蔵している図書館です。

一般財団法人センチュリー文化財団の所蔵品の多くは、2008年に創立150年を迎えた慶應義塾に寄託され、2021年3月にはその全件が寄贈されます。コレクションの中心となる書跡資料で注目されるのが『紺紙金字観普賢經』。後白河法皇の近臣であった平基親の自筆と考えられており、美術史的にも価値が高い文化財です。

IV

キャンパス の記憶



デモクラシー
1949年 猪熊弦一郎

写真提供：修復研究所21、
慶應義塾大学アート・センター

やがてすべては一つの円のなかに No.1
1982年 宇佐美圭司

写真提供：三田メディアセンター（慶應義塾図書館）



旧ノグチ・ルーム（三田キャンパス 第二研究室 談話室）
1951年 デザイン：イサム・ノグチ 建築設計：谷口吉郎

写真提供：慶應義塾大学アート・センター photo ©Ryota Atarashi



無
1950-51年 イサム・ノグチ

写真提供：慶應義塾ミュージアム・ commons
photo ©Katsura Muramatsu (Caloworks)



平和来
1952年
朝倉文夫

写真提供：慶應義塾大学アート・センター
photo ©Ryota Atarashi

三田キャンパスには歴史が刻まれた文化財があります。

1949年、学生ホール建設の際に、東西両壁面に描かれた猪熊弦一郎による壁画『デモクラシー』。現在は生協食堂に移設されています。

三田メディアセンター入り口にある壁画『やがてすべては一つの円のなかに No.1』。

1982年の開館時に画家の宇佐美圭司によって描かれました。

1951年、米国の彫刻家イサム・ノグチがデザインした第二研究室の談話室『旧ノグチ・ルーム』を、2005年に形を変えて南館に移築。その庭園のために制作された『無』も現在は南館屋上庭園に設置されています。

『平和来』は日本彫刻の泰斗である朝倉文夫の作品で、1957年に塾員有志が戦没した塾生の慰霊のために寄贈。台座に小泉信三の碑文「丘の上の平和なる日々に 征きて還らぬ人々を思ふ」が刻まれています。



憩うサルタンバンク
1905年 パブロ・ピカソ

写真提供：慶應義塾大学アート・センター



『仔馬』表紙原画
17号 1965年 岡本太郎

写真提供：慶應義塾ミュージアム・commons
photo ©Katsura Muramatsu (Caloworks)



富士山
横山大観

写真提供：慶應義塾ミュージアム・commons
photo ©Katsura Muramatsu (Caloworks)

慶應義塾の初等中等教育では芸術作品や芸術家が深い関わりを持ってきました。その一端を垣間見ることが出来る芸術作品を紹介します。

1949年に創刊し、今日まで発刊されている幼稚園出版誌『仔馬』では、さまざまな著名美術家たちが表紙原画を制作しています。岡本太郎もその一人で、かつて幼稚園、普通部と慶應義塾で学びました。

パブロ・ピカソ「バラ色の時代」の代表作が『サルタンバンク』シリーズ。砂漠を背景として巡業するサーカス芸人のサルタンバンク一家が描かれました。その一点である本作『憩うサルタンバンク』はドライポインント技法の銅版画です。

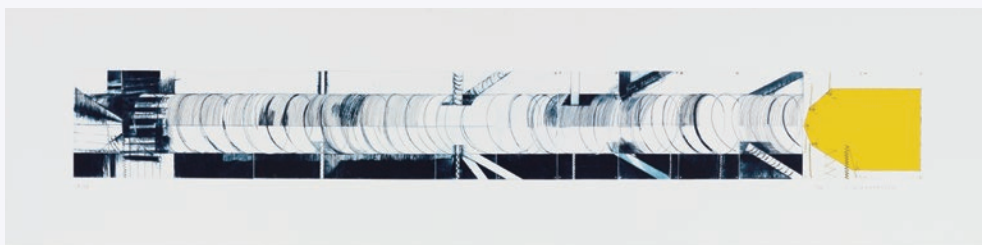
生涯にわたって数多くの富士山を描いた近代日本画の大家・横山大観の作品『富士山』。令孫が幼稚園在学中の1943年に寄贈され、2005年には修復が行われました。

VI

アートを
ひらく

慶應義塾志木高等学校 壁画
2003年 大山エンリコイサム

写真提供：ポーラ美術館 photo ©Shu Nakagawa



鮭の振動尺 I-A
1978年 若林 奮

写真提供：慶應義塾ミュージアム・ commons photo ©Katsura Muramatsu (Caloworks)

慶應義塾は未来のアーティストをひらく同時代作家たちの作品も受け入れ、活用しています。

2003年、作者・大山エンリコイサムが志木高等学校卒業時に現地制作した『慶應義塾志木高等学校 壁画』。大山は環境情報学部卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻に進み、現在ストリートアートから出発した独自のモチーフ「クイックターン・ストラクチャー」を起点にメディアを横断し表現する気鋭の美術家として活躍中。この作品は彼の芸術活動の原点の一つです。

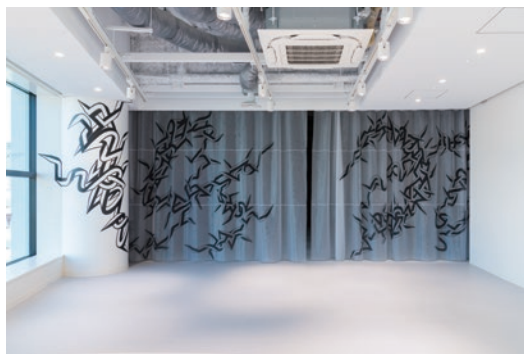
作者・若林奮は、現代彫刻の第一人者。2003年の没後も各地で作品展が開催されるなど高い人気を誇っています。深い自然観にもとづく制作をした彼の代表作の一つとされているのが『振動尺』と題された作品群。彫刻のほか、『鮭の振動尺 I-A』のように銅版画作品も多く残されています。

『慶應義塾名品撰』は以下で発売中です。

URL <https://keiogoods.jp>



「KeMCo」「塾史展示館」2つの展示施設が誕生



FFIGURATI # 314 (大山エンリコイサム、8F KeMCo Studi/O)
photo ©Katsura Muramatsu (Caloworks)



福澤諭吉記念慶應義塾史展示館の内部

三田キャンパス旧東別館跡地に建設され、2020年9月に竣工した「東別館」。地上11階建ての建物内に2021年4月、新しいコンセプトのミュージアム「慶應義塾ミュージアム・ロモンズ (Keio Museum Commons 略称: KeMCo)」がオープンします。

このミュージアムは慶應義塾がその歴史の中で蓄積してきた国宝・重要文化財を含む文化財や学術資料に加え、一般財団法人センチュリー文化財団から寄贈された美術作品など義塾の文化財を繋ぐハブとなります。

KeMCoはアナログとデジタルが融合合うこれまでにないミュージアム空間の中で、展示・収蔵にとどまらず、イベント、調査研究、アーカイヴなどを通じて、慶應義塾のアートとカルチャーを社会に展開。文化財を核とする教育、研究、コミュニティ活動の拠点として機能す

ることを目指します。最新のデジタル設備を備えた創造の場「KeMCo Studi/O (ケムコ・スタジオ)」には、美術家・大山エンリコイサム氏(塾員/環境情報学部卒業)のコミッション・ワークが設置されています。KeMCoの展覧会はどなたでも参加できます。

また今春には、図書館旧館に福澤諭吉の生涯と160年にわたる慶應義塾の歩みをたどる「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」が開設されます。展示は「颯々の章 福澤諭吉の出發」「智勇の章 文明の創造と学問の力」「独立自尊の章 私立の矜持と苦悩」「人間交際^{じんかん}の章 男女・家族・義塾・社会」の4章構成。解説文と展示物によるオーソドックスな展示のほか、模型やデジタルコンテンツにより塾史を多面的に振り返ることができる、どなたにも開かれた場となる予定です。

『論語』の解説書“最古の写本”を発見



紀元前6世紀頃の中国古代の思想家・孔子と弟子たちの対話をまとめた『論語』は、古来、日本人にも多大な影響を与えてきました。その論語の読み方を中国六朝時代の儒学者・皇侃（おうがん）（488～545）が解き明かした注釈書が『論語義疏』です。慶應義塾大学の研究グループが、2017年に古書店を介して購入した『論語義疏』を綿密に調査した結果、隋朝以前の中国写本と判明。遣隋使や遣唐使によって日本にもたらされ、人の手で伝えられてきた写本として最古のものであることが分かりました。

この写本は、2020年10月、東京駅近くの丸善・丸の内本店ギャラリーで開催された第32回慶應義塾図書館貴重書展示会「古代中世 日本人の読書」で初公開され、全国から1700名もの好事家が来場。新聞やテレビでも報道され、大きな注目を集めました。



名誉教授
佐藤 道生

最古の写本と判明した『論語義疏』は中国で作られたものですが、古代より日本人が何世紀も利用してきた「日本の文化財」。それを義塾図書館に収蔵できたことに大きな喜びを感じます。デジタルの時代とはいえ、古写本・古刊本の研究においては現物を見なければ分からないことがたくさんあります。展示会で「原本」をご覧になった方は、現物だけが持つ説得力を感じていただけたと思います。



附属研究所斯道文庫
教授
住吉 朋彦

『論語義疏』の調査に当たったのは、慶應義塾大学の書誌学、中国文学、国文学、日本史学などの専門家15名による研究グループです。紙の継ぎ目に押された「藤」の印から、平安時代の藤原氏の所有であったことが分かりました。しかし写本に年号等の記載はありません。そこで文字の様式や紙質などを詳しく分析した結果、“最古の写本”であることが判明。大きな発見となりました。